

ダブルクロスThe 3rd
EDITION リプレイ 朱き
黄昏のカノン

久那月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昨日と同じ今日

今日と同じ明日

世界は繰り返し時を刻み、変わらないように見えた。
だが、人々の知らないところで

世界は大きく変貌していた。

桜舞う彼の地で血肉を喰らう紅い影
指揮者の元を離れたカノンが牙を剥く

銀貨を握った指揮者のタクトは狂って揺れた
今宵、朱き黄昏に聖餐が開かれる

——ダブルクロス、それは裏切りを意味する言葉

使用ルールブック：基本1、2、上級

使用サプリメント：エフェクトアーカイブ

使用経験点：初期経験点＋70点＋4点

目次

ハンドアウト+PC紹介	1
OPENING 1	10
OPENING 2	19
OPENING 3	23
MIDDLE 1	28
MIDDLE 2	36

ハンドアウト+PC紹介

PC①あなたは新入りのUGNエージェントだ

推奨カヴァー：高校生

シナリオロイス：（P親近感／N任意）

あなたは今日からUGN朱鷺沢支部に配属される。そして、念願の高校デビューと新生活に胸を膨らませている。だが、この街は異変の真只中。貴方の新生活はこれを片付けなければ始まらないようだ。

名前：虎杖 いたどり つぐみ

コードネーム：吼え猛る雷 ライジング・ロア

年齢：15歳 性別：女性 星座：獅子座

身長：151cm 体重：41kg

血液：A型

出自：被験体 経験：研究機関 邂逅：保護者

覚醒：忘却 衝動：飢餓

ワークス：レネゲイドビーイングC

カヴァー：高校生

シンドローム：ブラックドッグ／ハヌマーン

能力値

肉体：3 感覚：2 精神：4 社会：1

技能表

知覚Lv1／RCLv10／意志Lv1／交渉Lv1／情報『UGN』Lv1

ロイス

Dロイス 古代種

保護者 姫宮 由里香（○P好意／N猜疑心）

研究機関 研究者（P誠意／○N恐怖）

エフェクト

〔一般〕リザレクトLv1／ワーディングLv1

〔RB〕ヒューマンズネイバーLv1／オリジン・レジェンドLv5

〔ブラックドッグ〕ハードワイヤードLv5／雷の槍Lv3／MAXボルテージLv1

雷の加護Lv3／フルインストールLv1

〔ハヌマーン〕サイレンの魔女Lv1／ライトスピードLv1

〔古代種〕フラットシフトLv1

「イージー」タッピング&オンエア／七色の声／セキュリティカット

一般アイテム

RCブースター×5

PC②あなたはこの街のオーヴァードだ

推奨カヴァー：高校生

シナリオロイス：葦原雪弥（P友情／N任意）

あなたはこの街のオーヴァードだ。UGN等、組織との関係は好きに決定して良い。この春から一つ学年が上がり、また今年も親友の雪弥と馬鹿をやることは内心嬉しいのだが、その雪弥の様子が最近おかしい。どうやらバイトを始めたようなのだが……。

名前：古月愛

ふるつきいとし

コードネーム：愛に全てを

ラブ・デラックス

年齢：16歳 性別：男性 星座：双子座

身長：178cm 体重：61kg

血液：O型

出自：姉妹 経験：逃走 邂逅：恩人

覚醒：命令 衝動：恐怖

ワークス：UGNエージェントD

カヴァー：高校生

シンドローム：バロール／ブラックドッグ

能力値

肉体：2 感覚：2 精神：3 社会：3

技能表

知覚Lv1／RC Lv1／交渉Lv1／調達Lv2／情報『UGN』Lv3

ロイス

Dロイス 秘密兵器

妹 古月 愛那^{まな}（OP慕情／N偏愛）

恩人 テレーズ・ブルム（OP感謝／N不安）

エフエクト

〔一般〕リザレクトLv1／ワーディングLv1

〔バロール〕斥力障壁Lv5／グラビティガードLv3／魔神の盾Lv3／空間圧縮L

V2

時の棺Lv1

「ブラックドッグ」球電の盾Lv5／電磁障壁Lv1／マグネットフォースLv1

「イーजी」ディメンジョンゲート／超人的代謝

防具

ブーストアーマー

PC③あなたはUGN支部長だ

推奨ワークス：UGN支部長

シナリオロイス：PC①（P好奇心／N不安）

あなたは、UGN朱鷺沢支部の支部長だ。そして、今日から一人、支部の人員が増えることになる。歓迎会でも開いてやりたいところだが、今朱鷺沢の町ではジャームが多く確認され、連日ジャーム狩りに駆り出されていてそんな余裕は無い。ならば、新入りの力を見極める一貫で事件解決を試みよう。

名前：紅夜・ブラッドレイ

コードネーム：憤怒の紅

ラース・オブ・レッド

年齢：25歳 性別：男性 星座：天秤座

身長：174cm 体重：55kg

血液：B型

出自：疎まれた子 経験：汚れ仕事 邂逅：腐れ縁

覚醒：生誕 衝動：嫌悪

ワークス：UGN支部長D

カヴァー：医者

シンドローム：ノイマン／ブラムⅡストーリーカー／モルフエウス

能力値

肉体：1 感覚：2 精神：6 社会：1

技能表

RCLvl／意志Lv1／知識『医学』Lv2／調達Lv1／情報『UGN』Lv1

ロイス

Dロイス 錬金術師

腐れ縁 マリア・チエスコフ（P慕情／ON厨気）

戦友 氏家侘助^{うじいえわびすけ}（OP信頼／N劣等感）

エフエクト

〔一般〕リザレクトLv1／ワーディングLv1

〔ノイマン〕コンセントレイト：ノイマンLv2／コントロールソートLv1

マルチウエポンLv4／ヴァリユアブルウエポンLv1／生き字引Lv1

〔ブラムllストーリーカー〕赫き剣Lv3／鮮血の一撃Lv3

〔モルフェウス〕インフィニティウエポンLv3／ダブルクリエイトLv1

〔イージ〕プロファイリング／無上厨师

PC④あなたは独自にレネゲイドとの繋がりがある

推奨ワークス：刑事、探偵

シナリオロイス：噂話（P任意／N敵愾心）

あなたは、大袈裟かもしれないが、この街の正義の番人の一人だ。UGNと協力し、幾度もこの街を脅かす脅威を退けている。そんなあなたは、化け物がこの街に巣食っているという噂の尻尾を踏んだ。いきなりホットスタートだ。

名前：日比谷 ひびや 公汰郎 こうたろう

コードネーム：主の錫杖 サテライトキャノン

年齢：25歳 性別：男性 星座：水瓶座

身長：182cm 体重：73kg

血液：A型

出自：安定した家庭 経験：死と再生 邂逅：殺意

覚醒：死 衝動：殺戮

ワークス：刑事

カヴァー：超あぶない刑事

シンドローム：エンジェルハイロウ／サラマンダー

能力値

肉体：2 感覚：5 精神：2 社会：2

技能表

運転Lv1／射撃Lv1／知覚Lv1／RC Lv5／調達Lv1／情報『裏社会』L

V1

ロイス

Dロイス 永遠の炎

父 日比谷 泰誠 (○P遺志／N悔悟)

仇 伊庭 宗一 (P執着／○N敵愾心)

エフエクト

〔一般〕リザレクトLv1／ワーディングLv1

〔エンジェルハイロウ〕コンセントレイト：エンジェルハイロウLv2／光の手Lv1

ピンポイントレザールLv1／主の恩恵Lv1／光芒の疾走Lv1

〔サラマンダー〕災厄の炎Lv1／プラズマカノンLv3／氷神の悲しみLv3

エターナルブレイズLv3／炎の加護Lv1

〔イージ〕炎の理／猟犬の華

OPENING 1

PC①③オープニング

虎杖 つぐみ 侵食率上昇

42%↓43%

深い深い森の中、一体の獣が駆け抜ける。

その日は、霏がかかるほど湿気が多い雨の日だった。

不快な湿気と雨水が汗と混ざって鼻先を伝う。

獣は、逃げていた。

長い帽子のようなものを頭に被っているのが印象的な、喋る猿から。

「小煩い猿が……。この朱鷺沢の森は神聖な地、貴様らが立ち入るべき場所ではない！」
「黙れ、物怪風情が！村々を襲い、穢れを齎す物怪は、御仏に代わってこの検怪違使が成敗してくれる！」

ケガイシ……？

まあ、いい。

この猿はどうしても自分に害を為すつもりのようなのだ。ならば、ここで迎え撃つのも選択の一つ。幸い敵は一人、我は雷の司。

雷獣『鵠』

「行人般若波羅蜜……!!」

猿が何やら呪文のようなものを唱えると、大地が抉れ、その破片が槍となつて襲い来る。

鵠は回避を試みようとするも、身体に重石を載せたかのように地面に縫いとめられ、上手く動かない。

だが……動く必要も無いと獣の勘で捉えた鵠は、身体の内側で吸い込んだ空気を反響させ、攻撃用の音波を生成、そして逆立った毛には、バチバチと紫色の雷が迸る。

光る雷鳴、爆音の槌。

それが検怪違使の男を襲う。

『ツツ!!!』

ゴロゴロゴロドツシャアアアンツ!!!!

「ひゃあっ!？」

「あら、おはよう。大丈夫? いきなり飛び起きて。悪い夢でも見たの?」

「ん……ふあ……ああ……。あ、いや、大丈夫。心配してくれてありがとう、由里香さん」
「そう? それなら良いのだけれど……」

わたし、虎杖つぐみは、ただいま新生活を行う街、朱鷺沢市に移動中です。

隣に座っているのは、姫宮 由里香さん。

身寄りの無いわたしの保護者代わりをしてくれている、素敵なお姉さんです。

「姫宮さん、あと5分程で到着致します」

「そう。……つぐみちゃん、貴女がいなくなると思うと寂しいわ。貴女より可愛いレネゲイドビーイングなんていないもの」

「わたしも、由里香さんと離れると思うと、寂しいです。身寄りも無い、記憶も無い、おまけに人間ですらないわたしに、ここまで良くしてくれたのは、由里香さんですから」
「つぐみちゃん!」

「由里香さん!」

ひしつ、と互いに抱き合う。

そういえば、今は卒業式のシーズンらしい。

わたしも、巣立ちの時が来たのです。

名残惜しいけれど、いつまでも由里香さんにお世話になりっぱなしという訳にもいかないのです。

「お盆とお正月には帰ってきます。由里香さんも、お仕事頑張ってくださいね」

「つぐみちゃんも、身体にだけは気をつけなさいね？ エージェントの仕事は、死と隣り合わせなんだから」

別れの挨拶をしている間に、目的地の場所

『氏家診療所』を掲げる建物の前に到着した。

今日からわたしは、ここでお仕事を頑張るのです！

「よお、嬢ちゃん。ウチに何の用だね？」

「（ガクガクブルブル）」

あ、ありのまま起こった事を話します！

診療所の中に入ったと思ったら、お顔が濃くて恐そうなおじさまに応接室のような部屋に案内されて、慣れた手付きでお茶とお菓子を出されてもてなされています！

事案発生とか、熟練してるとかそんな感じで、もつとすごいものの片鱗を味わいまし

た！

みたらしだんご美味しいです！

「あー……顔が恐くてすまん、嬢ちゃん。そのみたらしだんごに免じて許してくれや」
「許します！」

「……嬢ちゃん、紅夜の客だろう？もうしばらくしたら帰ってくるから、少し待っててくれ」

「帰ったぞ、氏家」

「おお、噂をすれば」

紅夜・ブラッドレイ 侵食率上昇

32%↓40%

紅夜と呼ばれた金髪赤眼で、少し痩せ気味の男の人は、まずわたしに軽く会釈をするとおじさまに、着替えて来る、と言って部屋から出て行きました。

見れば、元々白であったであろう上物のシャツは、鉄の臭いと赤黒いシミが付着していました。もしかしくなくても、血です。

「あの……氏家、さん？あの人は……？」

「ああ、あいつがここUGN朱鷺沢支部の支部長、紅夜・ブラッドレイだ」

「えっ!?あの人が、ですか!？」

「なんだ、顔写真くらいは資料にあると思っていたんだが……。……いや、ああ、そうかなるほど。奴なら顔写真が無くてもし方がない」

氏家さんは自分で納得すると、もう一人分のお茶の支度を始めました。

「ああ、待たせてすまなかった。虎杖つぐみ、ようこそ、UGN朱鷺沢支部へ。聞いたと思うが、俺はここの支部長を務めている紅夜・ブラッドレイだ。以後、よろしく頼むよ」

「改めまして、本日から配属される運びとなりました、虎杖つぐみです。不束者ですが、よろしく願います!」

同じテーブルで向き合うように座って、互いに挨拶を交わす。

支部長さんは微笑を一切崩さないまま、熱いお茶を啜っています。

「……ああ、美味しい。元気があつてよろしい。若者はそうでなくちや。さて……待ちに待った、新入りのエージェントだ。まずはしっかり、歓迎してやりたいところなんだが……生憎、今はそれに割く時間はない。どうしてだか、わかるね？」

「……さっきの、服に着いてた血、アレは、どうしたんですか？」

「ああ、いいね。勘のいい子は嫌いじゃない。……氏家、お茶、おかわり」

支部長さんは湯呑みをテーブルに置くと、懷から取り出した眼鏡をかける。

あ、眼鏡が良く似合ってます。

実はちよつとだけ、ドキツとしました。

「事の起こりは一週間ほど前だ。突如としてこの町に、『紅い影』が人を襲う、なんて噂が流れ始めた」

「紅い、影？」

「うむ。一般人からすれば、なんてこともない唯の噂話。実際の被害も出なきやそのうち消える他愛のない怪談さ。……こちらとしても、噂話で留まっついて欲しかったんだがね……」

「そうは問屋は降ろさない。火のない所に煙は立たぬ、つて言うだろう？ 紅夜、入った

ぞ」

「どーも。……ちよつと調べただけで、その紅い影はわんさか確認できた。さつきはそいつが事を起こす前に駆除してきたのさ。血は……必要経費と返り血さ」

「血が必要経費なら、そのシャツを着るのをやめてほしいんだが。一々シミ抜きする身にもなれ」

「へーへー」

どうやら、この街は事件に巻き込まれているようです。

紅い影は実物を見たことがないのでよくわかりませんが、これはUGNの仕事ということとはよくわかりました。

「わかりました！一般の方の被害を抑えた上で、この事件の解決を目指す、それがわたしの初任務ってことですね！不肖、虎杖つぐみ、一兵卒の身ですが、やーってやりますよ！」

「……そうか。なら、俺は支部長として、一兵卒が使えるかどうか見極める必要があるな。氏家」

「オーダーをくれ、支部長」

「今をもつて、紅い影に対し攻勢に出る。支部所属のエージェント並び近隣のUGNIリーガルに招集をかけろ。そして、高レネゲイド反応を確認し次第、随時連絡を寄越せ。何かあってもいいように、ホワイトハンドの準備は怠るな」

「了解」

「虎杖は俺と共に情報収集と、報告が入り次第、紅い影の討伐に向かう。配属して早々だが、しっかりと働いてもらおうぞ」

「イエス！サー！」

支部長の流れるような指示で、すぐに準備が進められていく。

生まれ持った指揮官の素質のようなものがあるのだろうか、痩せっぽちの身体でも、その姿は堂に入っていた。

「さあ、ネズミ狩りの時間だ。一匹たりとも逃すなよ」

OPENING 2

古月 愛 侵食率上昇

32%↓36%

「そんでさあ、ちゃんと補習受けてテストも受かって、なんとか単位貰って、奇跡の進級をキメた訳よ。どーだよ愛」

「それは良かった。そのおかげで僕は半額でバイキングが食べられるんだから」

午後13:30、授業が半ドンで終わった朱鷺沢市街は、暇な学生で溢れていた。

僕、古月愛は友人の葦原雪弥と共にバイキングレストランで遅めの昼食をとっていた。

本来大人一人二千円の食べ放題が、テスト勉強に付き合った報酬によって半額で食べられるのは学生にとっては大きい。

「俺の喜びは、お前にとつての食欲に劣るんですかねえ……。うっわ、食うなお前……」
「食べ放題だからね、モトは取らなきゃ」

ふむ、確かに僕が食べている量は世間一般からすれば多い方だろう。

テーブルの上の皿には、和洋折衷様々な料理が並んだ皿が所狭しと置かれていたが、開始数分で既に半分が胃の中に消えた。

残念ながら、これでもまだ足りない。またすぐに調達しなくては。

もつ、もつ、ごきゅ、んぐ、もぐもぐ……。

「うげ……」

もう半分が皿の上から消えたのを見た雪弥は顔を引きつらせる。

ここ最近、また食べる量が増えたな。

……まあ、仕方ないか。

「ふう。……そういえばさ、雪弥。キミ、最近痩せた？……いや、やつれた？」

丸顔の雪弥の顔が、いつもより萎んでいるように見える。

よく見れば目の下にクマもできているし、顔色も良くない。

「……ああ、いや、最近バイト始めてな。勉強しながらやってたからホント両立が辛くてさあ」

「いくら金欠だからって、そんな無茶しない方がいいよ。バイトしなくなつて死ぬわけじゃ無し」

「……いや、俺がやらなきゃいけないことなんだ。悪いな、心配させて。ちゃんと食うか

ら安心しろよ」

そう言うのと、雪弥は苦手なはずのニラレバ炒めに箸を伸ばし始めた。

「そう。なら、あんまり心配しないようにするよ。ちよつと席を外すね。取りに行つてくる」

「おう」

席を離れて、トイレの個室の中。

ポケットの中で振動していたスマートフォンが起動すると、見慣れた番号から着信通知があつた。

……やれやれ、またか。

いいよ、エネルギー補給したらすぐに行く。

一応、いつもの事を伝えるために電話を……。

いや、万一の事もあるだろう。

メールで要件を伝えておこう。

『GPS機能はONにしておくこと』

簡潔にそれだけ送信して、またホールに戻る。

「まだ、元を取るほど食べていないんだ。どうせ強いんだから、食べ終わるまで待つてよ、リーダー」

OPENING 3

日比谷 公汰郎 侵食率上昇

36%↓44%

3日ほど前の事だ。薄暗い路地の中、黒のダッフルコートに身を包んだ長身の男はそこにいた。

「……………」

オレ、日比谷 公汰郎は、牛乳とあんぱんを食べながら路地の陰から少し開けた場所を見張っている。

そこには、獣がいた。

……いや、獣の『ようなもの』と表現するのが正しいのだろう。

4足歩行で、大型の狩猟犬と同程度の骨格とサイズ。それだけならば、普通の獣と言ってもいいだろうが、全く違う箇所がある。

色だ。

『返り血を浴びたような』という表現が生易しく聞こえる、血そのもののドス黒い紅。

ぶち撒けた血液をスライムのように固めたらあんな獣もどきのようになるのだろう。加えて、獣もどきには体毛も感覚器官らしきものも見当たらず、全身がぬるりとして
いる。

……全く以って、レネゲイドウイルスというのは理解し難い。

「……さて、駆除を始めるか」

オレ残ったあんぱんを口に放り込み、牛乳で流し込んで獣もどきの前に出た。

そして、誰もこの場所に近寄らないように揺らめく炎を巻き上げて「ワーディング」を展開させる。

「……ッ!!バウツ、バウバウツ!!」

堂々と現れ、ワーディングを張ったオレに敵意を発するように、獣もどきは犬のように吠える。

「……弱い犬ほど良く吠える、そうだろうか?」

判定：目標値15

技能：白兵 射撃 RC

日比谷 公汰郎〔RC判定〕

エフェクト〔マイナー〕

無し

エフェクト〔メジャー〕

C：エンジェルハイロウルv2 C値―2

光の手Lv1 精神↓感覚

氷神の悲しみLv3 ダイス+3

〔C値8〕8D+5↓36

達成値36 成功！

侵食率

44%↓51%

『ガウアツ!!』

筋肉、いや神経系さえあるのかもわからない身体が、オレの喉笛目掛けて跳躍する。そして、大きく開いた口から覗いた牙が……。

氷柱に貫かれ、身体ごと凍りつく。

「冷徹なるオウエリスク。どうだ？熱量差によつて引き起こされる氷の槍は。……おつ

と、氷漬けじゃあものも言えないか」

陽炎となつて揺れる右腕を収め、路地を通りかかる人に怪しまれないようにその辺の鉄パイプで獣もどきの身体をバラバラに碎いてトドメを刺す。

これで氷が自然に溶けても問題は無いだろう。

「……ふう」

日比谷 公汰郎 侵食率上昇

44%↓51%

HP26↓23

ワーディングを解いて路地から出てから、平常時に精神を落ち着かせる。

昨日から、こんな目撃事例が多い。

どうも臭いと睨んで、部下に集めさせた情報を基に張り込んだらこれだ。

……仕方が無い。

あいつに報告し、助力を求めるところ。

この事件は警察よりもUGNの管轄。

裏にはおそらくFHも関わっている、と見た。

「……もしもし、紅夜。オレだ。お前らの仕事……何？ 大体わかった？ ならいい、R担^{ウチ}も

一枚噛ませろ。いいな？」

言うだけ言って、さっさと電話を切る。

契約会社が違うから長時間電話すると通話代が馬鹿にならない。

「やれやれ、まーた事件か。……気合い、入れ直すか」

何の因果か、この街には事件が起こりやすい何かがあるようだ。

事件が起こるたびに脳裏をよぎる血の記憶。

狩人が獲物を狩るように起こった、最悪の事件。

一人の男によって殺されたのは、自分も含めて41人。

「……やらせるものか」

生まれ育ったこの街で、もう二度と悲劇は起こさない。

警察官として、力を持つ者として、俺は誰かを護る為に戦い続ける。

そして、俺は『人』を殺さない。

M I D D L E 1

シーンプレイヤー：紅夜・ブラッドレイ

紅夜・ブラッドレイ 侵食率上昇

40%↓49%

虎杖 つぐみ 侵食率上昇

43%↓46%

俺と虎杖が情報収集をすべく足を運んだのは、行きつけの洒落た喫茶店、『アリア』
オススメは、ハチミツがたっぷりかかったパンケーキとアップルパイ、それと……。
『いらつしやいませー』

スカート丈が短いメイド服を身に纏った店員。

短めのスカートから伸びる白い太もも、そしてピンクのリボンがあしらわれた純白の
ニーソックス……。

たまらんな。

「支部長……。さつきからあの店員さんばかり見てませんか？」

「いいや、気のせいだ。……虎杖、好きなものを頼んでいいぞ」

「あ、じゃあハニーパンケーキとハニーアツプルパイとアツサムティーをお願いします」
「はやつー！」

頼んでいい『ぞ』と言った、その間0.5秒の間に虎杖はメニューから目敏くこの店
一押しの商品を注文しおった。

……愛より食い意地張ってるかもしれん……。

「……俺も、同じものを」

『かしこまりました』

そして、メイド服の店員はすぐさま注文を取ると厨房へ引つ込んでいった。

「……さて、虎杖。お前は何の為にここに來たか、覚えてるよな？」

「……早めのティーブレイク？」

……。

誰だ、こんなド天然に育てたやつは。

「違う、今回の事件の情報収集だ。……ま、早めのティーブレイクついでに寄ったのもあ

るが……。現状調べられる情報は何か、わかるか？」

「えっと……。まず、今この街で起きていること、そしてその紅い影、でしょうか？」

「正解だ。頭の回転が良くて助かる。ちゃんとPCは持って来てるな？ 手分けして調査するぞ」

「イエス、サー」

情報①朱鷺沢の現在の異変について

【情報：噂話】 難易度：9

情報②紅い影について

【知識：レネゲイド】 難易度：11

【情報：UGN】 難易度：11

「ふむ……。まずは近辺で何が起きているかを詳しく調べる必要があるな……」

判定：目標値9

技能：情報：噂話

紅夜・ブラッドレイ〔社会判定〕

エフエクト「マイナー」

無し

エフエクト「メジャー」

C : ノイマンLv2 C値—2

生き字引Lv1 社会↓精神 ダイス+1

〔C値8〕7D↓27

達成値27 成功！

侵食率

49%↓53%

PCで市内の掲示板の書き込みを覗き、信憑性や関連性がありそうなものを徐々にピックアップしていく。

そして、ちょっとしたツテで市内の監視カメラ映像から抜き出した写真から、その背景までも繋ぎ、矛盾の生じない確固たる情報を導き出す。

これぞ、紅夜・ブラッドレイの情報収集術、つてな。

「よし、俺ってば完璧だ。虎杖……うあ？」

「……………」

作成した資料を纏め終え、覚束ない手つきでキーボードを叩いていた虎杖を手伝おうと声をかけたところ、虎杖の様子がおかしい。

目を閉じて何かに集中しているような虎杖が、蛍に照らされたように淡い緑黄色の光に包まれている。

……そうか、そういえばこの娘はレネゲイドビーイング……。

判定：目標値11

技能：情報：UGN 知識：レネゲイド

虎杖つぐみ〔精神判定〕

エフエクト〔マイナー〕

オリジン・レジエンドLv5 シーン中精神判定達成値+10

エフエクト〔メジャー〕

無し

〔C値10〕 4D+10↓19

達成値19 成功!

侵食率

46%↓48%

「ティンつときたぜ!」

「っ!」

何かを閃いたらしく、突然出した声に驚いて紅茶を吹きかけた。

……客が少なかったのは幸いだろう。

「……まあいい。何か分かったんだな。共有するぞ」

「はいさー!」

情報①

現在、朱鷺沢の街にはジャームと思われる、通称『紅い影』が多数潜伏している。街中の監視カメラの映像を解析した結果、FHエージェント『ディアボロス』こと春日恭二と数名の研究者の姿を確認した。一連の事件にはFHが関わっている可能性が極めて高い。FHの目的の全体像は不明だが、紅い影が出現する数日前に市内の高校に通

う、葦原雪弥に接触をはかっていた。

情報②

『紅い影』と呼ばれるジャームは、ブラムⅡストーカーシンドロームに発症したオーヴァードが扱う、従者と呼ばれる血液で形作られた分身に酷似している。元あった従者に何らかの反応を与えて、ジャーム化させたものと思われる。

だが、普通の従者使いが操る従者は時間が経つと自然消滅する場合が多く、極稀に確認されるジャーム化した従者も9割以上がその限りではない。

詰まる所、紅い影を生み出したとされるオーヴァードは、通常の従者使いの比ではない力を持っているということになる。

NEXT

情報③ 葦原雪弥について

情報④ FHの動向について

「……ほう、やるじゃないか虎杖。Rラボにいただけあつて、レネゲイドの知識は中々……」

「ドヤア……」

興味深い上に、レネゲイドビーイングとしての観点からの資料は貴重だ。きちんと保管しておくことにしよう。

「よし、あと一個何か食ったら支部に戻るぞ」

「じゃあ、ハニーミルフィューで」

……新記録更新、間0.3秒。

ウチの支部の連中はどうしてこうも食い意地が張っている奴が集まるのだろうか。

ともあれ、将来有望な人材を手に入れたんだ。

食い意地程度は多めに見よう。

MIDDLE 2

シーンプレイヤー：古月 愛

古月 愛 侵食率上昇

36%↓44%

ズツ…

裏路地の人気が無い場所で虚空に手をかざし、別の場所へと繋がるゲートを作り出す。

行き先はここから徒歩30分程の氏家診療所だ。

「よい、しよっ……！」

きちんと診療所の玄関に繋がったのを確認して、跨いで移動する。

……本当に、急いでいるときはバロール能力者でよかった、って思うよ。

「こんにちは」

「おお、愛か。市街地からわざわざすまないな」

「いえ、ディメンジョンゲート使えばすぐですから」

浸食率

44%↓46%

午後2時半を少し回ったころ、リーダーから支部に出頭を命じられた。

どうせ家もここから歩いて3分もかからないので、顔を出すつもりだったのだけれど……。

リーダーから受けたメールを読み込んでから、変な汗が止まらない。

葦原 雪弥という学生がFHと接触をしていた。

……ああ、強心臓な僕でも、心臓が早鐘を打っているのがわかる。

「氏家さん、支部の設備借りますね」

「ああ。……愛、顔が強張ってるぞ。……焦るな」

分かってます、と返して支部のPCルームに入り、情報収集を始める。

頼む……人違いであってくれ……！

情報③葦原雪弥について

判定：目標値8

技能：情報：UGN

古月愛〔社会判定〕

エフエクト〔マイナー〕

無し

エフエクト〔メジャー〕

無し

〔C値10〕 3D+3↓12

達成値12 成功！

「……………っ、クソ……………！」

情報③

難易度8

葦原 雪弥についての調査資料書

ブラムIIストーリーカー／ウロボロスのクロスブリード。

コードネームは血染めの双子座^{ブラッディ・ツインズ}

UGNにもFHにも所属していないフリーのオーヴァード。

朱鷺沢市内の高校に籍を置く学生である。

レネゲイドウィルスとの適合率は極めて高く、従者を操る才能に長けている。

5年前にFHセル『12使徒の聖宮』に実験体として所属していたが、UGNの精鋭部隊によるセルの壊滅により解放された12人のオーヴァードの一人である。

NEXT

情報5 『12使徒の聖宮』について 難易度30

一瞬、頭が真っ白になる。

嫌だ。信じたくない。

雪弥が、親友が、この事件の中心にいるなんて、考えたくはなかった。

すぐさま携帯電話に手を伸ばし、雪弥の番号にコールする。

すると、幸いにもいつもの間の抜けた声で通話に応じた。

『もしもし、どうした、愛?』

「雪弥!今どこにいるんだ!」

『え?ちよ、どうしたよ……?え、駅前のコンビニだけど』

質問の言葉が出てこない。

聞きたいことはたくさんあるのに、焦りと、言葉にできない何かで、声に出すことができない。

「なんで、なんで……FHと関わってるんだよ……!」

だから、余裕も何もなく、ストレートに聞いてしまったんだ。

『……調べたのか?俺が元FHだって』

「……どうして」

『どうして、フリーの俺が今更FHと接触していたか、って聞きたいのか?』

雪弥は、いつものおちゃらけた態度は影も無く、怒っても笑ってもいない声で聞き返す。

その声に僕は無言で肯定してしまう。

『……安心しろよ、別にF Hに復帰するとかそんなんじゃない。……俺は頭悪いし、こういう時なんて言っていないかよくわかんねえけど……。ああ、過去の清算、つて奴か。うん、きつとそうだ』

「過去の、清算？」

『つーまた……！愛、また今度な！』

「待つ……!？」

また今度、そう言い残して雪弥は一方的に通話を切る。

雪弥の携帯の位置を逆探知して、すぐにデイメンジョンゲートを開こうとするも、向こうのレネゲイドが不安定なのか、ゲートを開くことができない。

「クソツ……!」

苛立ちをぶつけるように、拳を机に叩きつける。

そんなことをしたって意味なんてないって分かっているのに、苛立ちと焦りをぶつけずにはいらなかった。

「どうして、どうして僕はいつも……!」

大切な人の異変に、気づくことができないのだろう。

妹の身体の異変も、症状が進行してからようやく気付いた。
今回の事だって……。

……いや、気づくことが出来たのだろうか？

……このまま、もし、UGNの仕事が進んでしまったら？

雪弥の身に、大きな悪意が降り注いでいるとしたら？

……ああ、そうだ……。

「今、雪弥を助けられるのは、僕なんだ」

雪弥が無理をしてジャームに落ちてしまうのは見たくない。

ジャームに落ちてしまったら、その『処理』をするのはリーダーかハムタロさんだ。

僕は、僕の大事な人達を恨むことにはなりたくない。

それこそが、今の自分の欲望^願なんだ。

「……あのチャラ男、ちゃんと託びさせてやる」

雪弥を助けた後、ちゃんと腹を割って話しあうんだ。

だから……僕が、雪弥を救ってみせる。

過去の清算なんて、あいつには似合わない。頭が悪い馬鹿話が分相応だ。

「待ってろよ、雪弥」